

同人穂波¹⁾

——『基督教詩歌』誌上の長田穂波——

阿部 安成

[1] 香川県大島の療養所でその生涯のほとんどの日月をすごした長田穂波は、療養者として生き、キリスト教信徒であり、また、詩歌のひとつでもあった。生前に15冊の著作（ただし1冊は未見）を刊行し、没後には1冊の遺稿選集が編まれ、それが捧げられた穂波は、創設者のひとりとなったキリスト教信徒の団体である大島基督教霊交会の機関紙編集もその創刊から廃刊までのあいだをとおして担っていたほどに文筆に生きた療養者だった²⁾。穂波は、島外で編集発行されている逐次刊行物にもよく寄稿していた。だが、そのようすを知るのはかんたんではない。それというのも、穂波自身がなにをどこに書いたかという記録を残していないし、遺稿選集が編まれたといっても、第2、第3という続刊がおそらく意図されていたであろうにもかかわらず、それが第1巻だけで止まってしまったからだ。遺稿選集の編集にさいして、年賦も著作目録もそこに載せるゆとりはなかったのだろう。

そうしたなか、2010年に霊交会がかつての機関紙『霊交』のリプリント復刻版を制作して、関係者や公共図書館に配布したところ、おもいもかけない穂波についての情報が提供されたのだった。この教示によって、穂波が逐次刊行物の『基督教家庭新聞』に寄稿していたことがわかった³⁾。

『基督教家庭新聞』に連載された長谷部俊一郎の「現代宗教詩の鑑賞」第3回において、

1) 本稿は、2010年度滋賀大学研究推進プログラム「基盤研究」助成による研究題目「20世紀日本のハンセン病療養所における生命管理の実証研究」の成果の1つである。

2) 穂波については、ひとまず、阿部安成「長田穂波の痕跡－療養所の生のあらわれ方」（『ハンセン病市民学会年報2008』2009年）、同「史伝としての『霊交』－大島療養所基督教霊交会の機関紙を歴史化する」（滋賀大学経済学部Working Paper Series No.132、2010年5月）を参照。

3) これについては、阿部安成「穂波寄稿－『基督教家庭新聞』誌上の長田穂波」（滋賀大学経済学部Working Paper Seriesとして発表予定）を参照。創刊の時期、調査の時期はともに『基督教家庭新聞』のほうが『基督教詩歌』よりさきだったが、調査終了は後者が早かったため、それから紹介することとした。

穂波そのひとと彼の詩がとりあげられている（第34巻第12号、1941年12月1日）。

長田穂波氏といへば、昭和三年詩集「靈魂は羽ばたく」を出して以来、ひろく教界にその名を知られた香川県大島療養所に病を養ひながら、いまなほ熱烈な信仰に生き、同志と共に靈交会を組織して健闘してゐる現代のヨブといはれてゐる人である。

との紹介がみえる。「宗教詩人」穂波の作品として掲載された詩が、「ひとことの祈り」で、それは、「作者が昨年十二月号基督教詩歌誌に寄せた詩」だったという。その掲載誌が、『基督教詩歌』第5巻第6号12月号（1940年12月10日）である。穂波が寄稿していた逐次刊行物がまた1つわかつたのである。『基督教家庭新聞』も『基督教詩歌』もともに、大島ではまったくみつからない。『基督教詩歌』をNDL-OPACとWebcat Plusで検索したところ、茨城大学図書館本館と日本近代文学館にあるとわかつた⁴⁾。本稿では、『基督教詩歌』という逐次刊行物を紹介しつつ、その誌上から穂波がなにを発信していたのかをみて⁵⁾、それについての論点を示すとしてしよう。

〔2〕 まず、『基督教詩歌』という逐次刊行物についてみよう。茨城大学図書館本館では、1(1-3)、2(1-6)、1936-1937、を所蔵（製本済）、日本近代文学館では、2(4)、3(1,3)、4(6)、5(4-6)、6(1,3-5)、7(1,2)、1937-1942、を所蔵している（2(4)は第2巻第4号をあらわす。以下でもとときにこうした略記をする）。同誌はおそらく隔月刊で年に6回の発行を数えたのだろう。2つの館での所蔵をあわせると、創刊から終刊となった第7巻第2号まで全35冊が発行されたそのうちの21冊が残っていることとなる。

創刊号の表紙には、「きりすと教詩歌」「JUL. 1936」とのみ印字されている⁶⁾。奥付の発行年月日は1936年7月9日、編輯兼発行者は長谷部俊一郎、発行所がきりすと教詩

4) 『基督教詩歌』は『基督教家庭新聞』を所蔵する国際基督教大学、東京神学大学、東北学院大学のいずれにもない。いまのところわかっている所蔵機関は前記2館のみ。

5) 穂波の作品などの入力には滋賀大学経済経営研究所の研究サポートを得た。

6) 表紙には受入印があり茨城大学図書館では1983年9月28日に同書が「編入」された。表紙にはまた鉛筆による「1-2巻/1936-37/1500-」との手書きがある。1500円で購入したということか。同館のOPACの同誌書誌情報に第3巻第1号をもってそれまでの誌名「きりすと教詩歌」が「基督教詩歌」となったとの注記がある。ただしあとでみるとおり創刊号に掲載された「我等の主張」にも「雑誌「基督教詩歌」を発行」とあり誌名の表記は1つに定まっていたわけではないようだ。本稿本文では後者の誌名を用いる。

歌社で、長谷部の住所ときりすと教詩歌社の所在地は同一の仙台市長町西浦 382、となっている⁷⁾。定価は 10 銭。

創刊号では、目次のつぎの頁の上段に「我等の主張」、下段に「基督教詩歌同人（順序不同）」が配されている。前者の全文をあげよう。

我等の主張

一、我等は聖名のゆゑに日本に於ける基督教文学の興隆を図り、民族の中に新しき詩歌を創造せんことを期するものである。

二、我等はこの意味に於て詩、短歌、俳句、随筆等一切を含む総合的意図の下に渾然たる流をつくり、更に独自なる気運をつくらんが為、同人の推薦により相当の力量ありと認めたる同志を同人の列に加へ、また購読者をもつて社友とし、投稿其他の便宜を図るものとす。

三、我等は右のため雑誌「基督教詩歌」を発行し互に若き時代に呼びかけ、この運動を徹底せしめんとするものである。

ついでここにその名があげられた同人は、坂内雅泉史、後藤僕子、遠藤蒼風、長谷部俊一郎、蓬田吉次郎、佐藤敏也、渥美芳直、橋本東吾、由木康、脇屋義人、松本宗吉、高瀬恒徳、河野進、松田明三郎、松沢兼人の 15 名⁸⁾。

創刊号にはまた、「雑誌「基督教詩歌」発刊に際して」と「発刊に際して」がそれぞれ 1 頁（上下 2 段）ずつ載っている。前者は長谷部俊一郎、後者が渥美芳直の執筆となる。長谷部はその冒頭に、「わが国基督教詩歌史に於て意義づけらるべき全国を網羅する詩歌人最初の同盟結成の具体的現れとして今回「基督教詩歌」創刊号を世に送ることが出来た」との感慨を表明している。そして、「わが国文学史に於て、未だその花咲かざるプロテスタントの持つ聖文学を創作」することを「運動」ととらえ、それを「拡大強化し、一つのながれをつくりたく思ふ」との方針と展望を示したうえで、「こゝに私はこれまでに至つた経

⁷⁾ 仙台が発行地とわかったところで宮城県立図書館ホームページの「宮城県内図書館総合目録（横断検索）」で検索したがヒットしなかった（2010年12月14日検索）。

⁸⁾ ここに名がみえる河野進は霊交会と関係のある人物であるが、まだその詳細を把握していない。穂波がきりすと教詩歌社同人となるにあたって、彼の推薦があつた可能性がある。

過を発表し、また今後の方向についても一言ふれてみたく考へる」機会としてこの頁を活用している。

創刊の経緯はというと、ここに発刊された逐次刊行物は、かつて1933年2月に創刊した雑誌『蒼空』のあとを継ぐという系譜におかれている⁹⁾。その使命とは、

現実の分野をみて、基督教文学に対する期待の大きく、而も基督教詩歌人の聯盟結成さへも出来てゐない時に、この「蒼空」の培つて来た一つの存在をもつて、これを拡大強化し、やがて真に質量共に生前活潑なる組織を現すことこそ、この「蒼空」の使命を意義づけるものであるを知つた

と説かれる。『蒼空』のその使命をつぎへとつなぐ企図が、長谷部によって「今年〔1936年——引用者による。以下同〕四月仙台に於て、日本基督東北中会の開催の際、私はこの意味の拡大強化を同人に図り、これを骨子として全国の詩歌人を網羅する新な気運喚発を提議」された。これが「新運動」としての『基督教詩歌』発刊となつたのである。

「発刊に際して」を記した渥美は、「本誌「基督教詩歌」の誕生」を、「社会の情勢や思想の変遷に伴ひ幾多の消長があつた」「我国詩壇の過去」にみている。「大正十年頃よりの数年間は華やかなる時代」だったが、その後には「頹廢的な、或ひは唯物主義的な作品が多く見らるゝ様になつてしまひ、さらに「現在は沈滞して何ら見るべきものがない」という現状とここにいたるまでの推移がたどられている。「基督教詩人」としての自分たちにとって、「僅かに我等の渴を医やすものは、外邦の詩人によつて歌はれた宗教的気品の高い詩篇」にすぎず、しかし、「如何にすぐれたるものにせよ、我々日本人にとつては意に満たざるものがあり、日本人基督者のうちの詩人によつて歌はれる優れた作品に多大の期待をかける」との、キリスト者であることとナショナルな観点の合一から、「我国基督教詩歌人が一致団結」し、逐次刊行物の創刊が目指されたというのである。

「月刊のつもりではちめたのが、私自身、目下非常に忙しい仕事の関係で、も少し基礎がすわり落ちつくまで隔月刊として発行したい」（長谷部「編輯後記」）との方針も掲げら

⁹⁾ 発刊時の同人だった後藤、坂内、遠藤、長谷部による「地方的また内輪的な季刊雑誌」で「質量共に一つの基督教詩歌の水準を示し得た」号もみせたが、1936年4月までに11号を刊行して「使命を了つた」ととらえられている。いまのところ同誌の所在は不明。

れた。長谷部の多忙が解消しなかったのか、同誌は終刊まで隔月刊のままとなる。

第1巻第2号が1936年9月7日に発行される。誌代が15銭にあがる。「増頁を余儀なくされ」たためという（長谷部生「編輯後記」）。さきに示された「我等の主張」に、2つの条項——「一、「基督教詩歌」は目下隔月発行となし原稿締切りは発行月の最終日とす。／一、同人費は毎月五十銭／社費は半年分五十銭」がくわわった「社規」が掲載された。

「新刊紹介」にはその1冊に、長島詩謡会編『長島詩謡』（長崎書店、1936年）がみえる。この書は、さきにふれた『基督教詩歌』の母体ともいいうる『蒼空』でかつて「紹介した坂井新一を生んだ長島愛生園の不幸な同胞達はその悲しみと悩みの中よりの叫びとして歌つたものの第一輯」であると報せている。ここに、長谷部たちの運動と『基督教詩歌』誌面と癩=ハンセン病とが繋がった。「現代日本詩人達の多くが作る言葉の遊戯の様なくだらぬ詩」があるなかで、「真率な魂を甦ぐる力を覚えたことは事実だ」と、ここでも、現状にむける糾弾の素材となりうる『長島詩謡』の読み方が紹介されるのである。明石海人、青木、大木繁幹の短歌や散文詩が「みんな実感の詩だ。レプラの持つ嘆き——それが回想に漂って読者に迫る」との評価が発信された。「全体の作品は概して暗い、之は恐らく当然であらう」との概観をあわせてみると、悲哀、悲嘆、自嘲、憂愁の感情や情趣が、紹介ないし感想の機軸にある。これを感傷主義のあらわれとってよいかもしれない¹⁰⁾。

『長島詩謡』の紹介にあわせて、つぎの一文もみえる——「目下「愛生園」では問題を起してゐる、彼等もその一人一人であらうが、このやうな歌謡をよむにつけ、看過出来^{〔ママ〕}ね問題がそこに潜んでゐて彼等に迫ってくる」。「問題」とは、1936年8月に発生した「処遇の改善を掲げて入所者が園と対立した長島事件」を指す¹¹⁾。ここにいう見過ごせない問題と、長島愛生園に生きるものたちが発する「真率な魂を甦ぐる力」とがどのように結びつくのか、それは考察されていない。

10) 癩=ハンセン病をめぐる感傷主義については、阿部安成「悲しみの根、悲しさのゆくて—瀬戸内国際芸術祭 2010 展示作品解剖台が涙を誘った」（滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.141、2010年12月）を参照。

11) これについては、岡山県ハンセン病問題関連史料調査委員会、ハンセン病問題関連史料調査専門員編『長島は語る 岡山県ハンセン病関係資料集・前編』（岡山県、2007年）第4章「長島事件と自治」を参照。

さて、長谷部の「編輯後記」によると、「創刊号は発行してすぐに売切れ、あとから大部購読を依頼して来たが、残念乍ら送ることが出来なかつた」と悔やまれている。「新興基督教」「基督教大衆新聞」「基督教家庭新聞」「葡萄之枝」「子供之教養」等、私の目にとまつた雑誌新聞でも五種にこの小誌の紹介の出たことはうれしかつた。各その編輯者に御礼を申したい」との謝辞からは、当時発行されていた関連する逐次刊行物になにがあつたのかがわかる¹²⁾。それらの誌上での紹介も得て、売れゆきもよく、執筆の勢いもたかまり、第2号はページも増えた。巻末の「誌友紹介」には、24人の名が記され、「投稿が出来るものとして数えあげられたのだった。

第1巻第3号(1936年11月10日)に、穂波の作品が初めて掲載される。目次のつぎの頁には、「我等の主張」と「基督教詩歌同人」が掲げられ、同人名簿には創刊時の同人に、掲載順にあげると斎藤潔、楡恵介、錦織久良子、宮川勇、白石濤村、長田穂波の6名がくわわっている。文字どおり同人の末席につらなつた穂波が、誌面において詩を発表したのだった。「新同人紹介」では、その冒頭に穂波がおかれている。その記述をみよう。

長田穂波氏 ここに紹介するまでもない程、我国の生んだ基督教詩人として有名な「靈魂は羽ばたく」以下数冊の宗教詩集を出された方。我等の同人として活躍を期待される。

(住所香川県木田郡庵治村六〇三四ノ一)〔引用部全文ルビなし〕

この1936年の時点ですでに穂波は、9冊の著作を上梓していた。おなじ頁にある「基督教詩歌壇覚書き」欄には、「○長谷部俊一郎氏 基督教家庭新聞同九月号より「基督教詩人名詩鑑賞」を執筆中」とみえる。そこには、穂波も登場することとなる。著名な「基督教詩人」として、その住所も紹介された穂波ではあるが、この情報だけでは庵治村6034の1

¹²⁾ それぞれの所蔵をみるとNDL-OPACではどれもヒットせず、NACSIS Webcatではつぎのとおり、『新興基督教』(日本近代文学館、東北学院大学中央図書館、東京神学大学図書館などで1930年から1943年までの発行分を所蔵)、『基督教大衆新聞』(同志社大学で1937年から1967年まで所蔵)、『基督教家庭新聞』は別稿参照、『葡萄之枝』(梅花女子大学図書館と関東学院大学図書館で1934年から1943年まで所蔵)、『子供之教』(なし)(2010年12月14日検索)。このうち同誌第2巻第6号第9輯(1937年11月3日)の「編輯後記」に「寄贈雑誌」として「聖書通信、児童文化、福音と兄弟愛、高原、光、東光、新興基督教、基督教家庭新聞、神学評論、ことば、聖書智識、信仰と生活、葡萄之枝、神の国新聞、横浜青年、その他」の各誌があがっている。のちにみるとおり「高原」は草津の療養所とのつながりを推測させ、他方で、『靈交』は寄贈されていなかったのか、その他にふくまれたのか気になるところである。

が大島療養所の所在地であることも、彼が療養者だともわからない。

本誌同号の奥付うえに載る「社規」には、短歌、俳句、詩それぞれの「選者」が示されている。詩は長谷部である。

第2巻第1号（1937年1月1日）に「除夜の鐘」の題をつけた詩を載せた穂波は、同号「基督教詩歌新年号覚書き」で、「長田穂波氏 新聞「^{（マ）}霊光」十二月号に「祝救主御降誕」以下三篇の感想文をのせる」（ルビなし）と紹介され、また、長谷部による「昭和十一年度基督教詩壇回顧と今年の展望」では、「長田穂波氏は個人新聞「霊光」に一、二篇づゝ詩を発表してゐる」ととりあげられている。「霊交」の紙名表記とともに「個人新聞」とはおおきな誤解である。とはいえ、『霊交』が穂波ひとりによる発行とみられたとしても仕方ないところはある。それはともかく、『霊交』1936年12月発行号（第217号）をみると、そこに穂波が、「祝救主御降誕」「静かな力よ」「断片集」、そして無署名の「編輯後記」を執筆したとわかる。

『基督教詩歌』同号の「全国基督教詩歌人住所録」では66名の名が記され、そのなかには、詩人としての穂波があり、もうひとり、東京府下東村山全生病院の原田嘉悦も俳人に数えられていた¹³⁾。

同人数が31名となった第2巻第2号（1937年3月17日）には、穂波の詩「霊交」が載る。「編輯後記」では、

ポツポツこの雑誌の存在が教界から認められつゝあるやうだ。そんなことはどうでもよい。真に迫る立派な文学。これが現在我等のもつてゐる文学ですと、どこへ出してもはづかしくない作品が紙上に現れるやうにと願ふ。我等の生活がまだそこまで行つてゐないのだ。互にいましめて立派な生活をしてゆきたい。

との気概が示された。

第2巻第3号（1937年5月10日）刊行時の同人は32名。穂波のいわば席次は21番のまま。この号に穂波は詩「わが身を語る」を寄せた。裏表紙には、穂波の詩集『靈魂は羽

13) 原田には、『野のかほり』（飯田十造、1936年）、『天路を拓く』（教文館、1938年）、『いのちの真珠』（日本MTL、1972年）、「逆境の光」（山下道輔ほか編『ハンセン病文学資料拾遺』国立療養所多磨全生園自治会ハンセン病図書館、2004年）の著作がある。

ばたく』の広告がみえる。同号にはまた、前々号（第2巻第1号）についての「新年号の詩総評」が、執筆依頼をうけた蓬田吉次郎によって記されている。彼の穂波評をみよう。

除夜の鐘 長田穂波／作者独自の体験より湧き出でし力強き信仰詩である。体マ体マとして渾一したうるほひがあり力強い美しさがある。之が真個の讚美であらう。この作者の上に祝福を祈る。

との好評である。穂波の詩に「力強」さが看取されている。しかしやはり、穂波の「作者独自の体験」がなにかは説かれていない。

第2巻第4号（1937年7月3日）刊行時の同人34名と微増がつづく¹⁴⁾。このとき新加入した同人のひとりに藤本秋風がいる。「新同人紹介」欄では、

○藤本秋風氏 昭和七年同志と雑誌「高原」を発行、今日に至る。詩誌「愛誦」「蠟人形」「詩洋」等に関係し、著書アンソロジー「現代日本詩集」「日本山嶽詩集」「現代随筆選集」「日本放浪詩集」その他あり。現住所群馬県草津町高原社内（長谷部氏紹介）

とのみ紹介された。藤本はこののち、同誌第3巻第1号第10輯（1938年1月1日）に掲載された「全国基督教詩歌人住所録（昭和十二年十二月現在基督教詩歌社調）」に「詩人」として掲載される。同誌第2巻第5号（1937年9月7日）には、「光の中」という題の詩を寄稿する。藤本はまたべつに、多磨全生園で発行された『山桜』通巻第285号第27巻第7号（1946年7月）に、「遺作中より「山」「鈴蘭—春子に寄す」の稿が載ることともなる¹⁵⁾。筆者名には「故」がつき、藤本が死去していると報せている。藤本は栗生楽泉園にいた療養者だろうか。その詳細はわからない。

同号に穂波は「朝に勇み夕に憩ふ」を寄せた。斎藤潔による既刊号掲載稿についての「五月号詩評」では、

○わが身を語る（長田穂波）氏の詩は、氏を知るもののため存在するといひ得るであらう。といふ意味は氏への同情と理解はその詩をしてより多く氏へ近づかしめる鍵である

14) この時点で読者数は「六十名に近い」ところだった（長谷部俊一郎「発刊一週を省る」2(4)）。

15) 『山桜』の目次については柴田隆行編「『山桜』『多磨』総目次 改訂増補版」を参照（<http://www2.toyo.ac.jp/~stein/tamaindex-all.pdf>。2010年12月14日閲覧）。

からである。今度の詩は、氏として極めて常識的である。詩とは、心が笑はなければ言葉も決して笑はぬことを知らしめられる。氏の詩には深淵を視く蒼涼さがある。

やはり、なぜ「同情と理解」が穂波にむけられなくてはならないのかは説かれていない。創刊「一週年記念」として刊行された同号の「発刊一週年を省る」で長谷部は、同人ひとりひとりの作風をあげ、穂波については「長田の熱烈」と記した。

第2巻第5号（1937年9月7日）刊行時の同人は33名とひとり減る。穂波の寄稿は、「聖婚歌」という詩1編。同号に掲載された長谷部、渥美、橋本、勝又による「一週年記念号合評」は穂波にきびしい。「朝に勇み夕に憩ふ 長田穂波/A 情熱が足りない、だから読んで受ける感動が少い、表現法も古い/D 概念的で、自己の表現が薄弱でないでせうか」と評価が一変するにはなにかがあったのだろうか。

同号「編輯後記」（長谷部生）では、

六月下旬、同志社に於て宗教文学読本三巻が編纂発行された。伊庭菊次郎氏、長谷川初音氏が専らその衝にあたられたらしいが、わが同人中で斎藤潔氏の詩、長田穂波氏の詩、松田明三郎氏の訳詩、私の詩と詩の鑑賞文が選ばれてあり、詩壇のため意を強うした。との紹介がある。ここにいう文献は、宗教教育調査委員会編『宗教文学読本』全3巻（同志社、1937年）を指す¹⁶⁾。

ここで、『宗教文学読本』をみておこう。同書1は1937年発行、ただし同志社大学所蔵本は1938年再版、同書2と3も発行年と所蔵版は同前。同書1には34、同書2は32、同書3は34の作品が収録されている。同書1では、長谷部俊一郎の「星」に始まり、ツルゲーネフ「親雀」、トルストイ「三つの疑問」、新渡戸稲造「小天使」、賀川豊彦「おうめさん」、島崎藤村「書籍」「林檎」、川端康成「望郷台」が、同書2には、山村暮鳥「友におくる詩」に始まり、新島襄「実力を養へ」、内村鑑三「偶感二篇」「愛のはたらき」、本間俊平「永遠の忍耐」、羽仁もと子「若しも私が継母であつたら」「母の手紙」、上野いと子「ヘレン・ケラー女史」、小室篤次訳「ヘレン・ケラーの言葉」が、同書3には、徳富蘆花「我

¹⁶⁾ 同書のNACSIS Webcatでの検索結果は同志社大学図書館今出川図書館に全巻、梅花女子大学図書館に1があり、NDL-OPACではヒットしなかった（2010年12月14日検索）。

が父は農夫なり」、海老名弾正「祈」、ツルゲーネフ／神西清訳「キリスト」などが収録されている。そうしたなか、同書2に穂波の「いためる時計」、同書3に「聖叫」がみえる。前者は『霊火は燃ゆる』からの転載、後者に出典は記されていない。

同書は本文の頭注に作者の紹介が記されている。同書2では、

をさだほなみ長田穂波／明治二十四年徳島県に生る。若くして癩に犯され、明治四十二年以来大島療養所にあり。大正三年受洗。たゞ信仰によつて読み、書き、思想し、小学校中退の人とも見えず、不自由の手にペンを結びつけて詩集を世に出すもの既に数部。

という。いくらか異なる同書3での紹介もあげよう。

をさだほなみ長田穂波／明治二十四年徳島県に生る。若くして癩患に犯され、明治四十二年以来大島療養所にあり。大正三年受洗。其信仰は小学校中途退学の氏をしてよく読ましめ、よく思想せしめ、不自由の手にペンを結びつけてものせし詩集の世に出でしもの既に数冊、文字通りの命がけの信仰の勝利者である。

穂波の姓はしばしば「ながた」と訓じられてきた。それがここでは「をさだ」となっているとところに注目しよう。これは、彼自身が望む読み方でもあった¹⁷⁾。前者と後者とでは執筆者がかわったのか、あるいは同一人による執筆であっても穂波への思いが深まったのか、たんに穂波を紹介するにとどまらず、彼への理解をすすめようとする意思がみえる文章となっている。

『基督教詩歌』にもどろう。第2巻第6号第9輯（1937年11月3日）刊行時の同人は34名。穂波の寄稿は「希望は確し」の1編。大人数の17名による「前月号詩合評会」では、

聖婚歌 長田穂波／長〔長谷部〕 長田さんとしては良。柔かい情熱の気が漲つてゐる。

／前〔前川牧師〕 余韻条々としてゐるね。／尾〔尾形亀之助〕 しかし未だ足りない。

半分足りない。／高〔高瀬〕 説明が多すぎますね。

とのことだ。

¹⁷⁾ 前掲阿部「長田穂波の痕跡」を参照。

③ つぎの号からは、日本近代文学館所蔵分となる（すべて未製本）。「日本近代文学館／鏝田文庫／鏝田・徳座家寄贈」のスタンプが 3(1)、3(3)、4(6)に、「日本近代文学館 菅野俊之 氏寄贈」のスタンプ（寄贈者名のみ手書き）が 5(4)、5(5)、5(6)、6(1)、6(3)、6(4)、6(5)に押されてある。

第3巻第1号第10輯（1938年1月1日）の表紙には、「現代自選詞華集」との印字がある。同人数は36。穂波の寄稿は「元日の訪問者」の1編。

同号掲載の「全国基督教詩歌人住所録（昭和十二年十二月現在基督教詩歌社調）」をみると、「詩人」欄で穂波にくわえて、前記の藤本秋風がくわわり、他方で、さきの同欄にあった原田嘉悦が消えている。

第3巻第3号（1938年5月5日）に掲載された穂波の詩は「うたふ妹」。なお、同号の8頁はその一部が切り取られていて、おそらくそこにあった過去の号の合評欄が欠けてしまっている。わかるかぎり引用すると、

長田穂波氏の古稿三題、長田氏の初期のものは少くとも情熱が文字を越えて感じられた。
／それがあつて意味で破綻を救つてアツピールしてあると言へる。が最近のにはそれが失はれて〔後欠〕

となる。『基督教詩歌』誌上では、穂波の作品の変化が着目され、しかもそれはよくないかわりようとうけとられていた。

「新刊紹介」欄には、長谷部の『現代宗教詩鑑賞』がとりあげられた。「本書は、明治以降今日に至るまで、我日本基督教が生んだ宗教詩人の業績の記念碑であり、炬火であり、詞華集であり、且著者が丹精懇切に各詩人の代表作品を註釈したもので」、作品が収録された詩人は、「前篇は半月、湖処子、独歩、醒川、鑑三、星淵、中篇は露風、虎市、豊彦、暮鳥、藻風、下篇は潔、明三郎、穂波、恒徳、勇、康、元一郎、二郎、俊一郎」である。「小巻ではあるが、心ある人士へのよき友であらう。青年舎やミツシヨン・スクールの課外文学読本や、贈りものなどにふさわしい」とも勧められている。

同書は、いまのところ国立国会図書館と東京神学大学図書館にしかない。1938年3月30日発行、11.2cm×15.8cmの小ぶりの本は、羊門文庫の6。発行所は羊門社、発売所が

一粒社で、前者の所在地は、発行者横井秀子と印刷者横井憲太郎の住所となっている。横井夫婦が経営していたとおもわれる一粒社は¹⁸⁾、キリスト教信仰にかかわる書籍を多数出版し、穂波の『詩集 雲なき空』を1935年に発行していた。いましばらく同書について記しておこう。

著者による「小序」には、この書が「昨年十一月号まで、十三回にわたり、「^(マ)基督教家庭新聞」に連載した「現代基督教詩人・名詩鑑賞」を骨子として、二、三の詩人の追加をなし、改訂したもの」と刊行の経緯が説明されている。昭和現代篇のなかに基督教詩歌社同人たちとともに穂波の名が確認できる。詩集『靈魂は羽ばたく』から「我れ十字架を語らんか」「血のない社会」の詩2編が転載され、その「鑑賞」の仕方が説かれる。それはまたべつにみるとして、「卷末小伝」の穂波についての記述を引用しよう。

長田穂波 明治二十四年十月二十四日、徳島県枝野郡堀江村に生る。高等小学卒業後間もなく発病、明治四十二年大島療養所に入院し現在に及ぶ。詩集「靈魂は羽ばたく」「雲なき空」その他数種あり。現住所、香川県木田郡庵治村六〇三四ノ一。〔引用部全文ルビなし〕

郡名は正しくは板野郡。大島でかつて回覧された手づくりの雑誌『青松』第17号長田穂波追悼号(1946年1月)に収載された、大島キリスト教霊交会の林友吉による「弔詞」では、穂波の生年月日は明治24年10月22日となっている。彼の生まれた日が22日なのか24日なのか、いまわたしは、それを確かめる術を知らない。このとおり、穂波の年譜をつくろうとするとき、その情報はまだまだ足りないのだ。

さて、『基督教詩歌』にもどろう。第1巻第3号からは、誌代がおそらく「社費」として記載され、それが17銭となり、第2巻第3号から20銭に値上がり、第3巻第3号からそれが「定価」と明示された。「基督教詩歌」が仙台の同人の手を離れて、愈々東京の同人たちの手に託されることが決定し、この号が「本誌の東京へ移つての第一号」となった(「編輯後記」)。編輯兼発行人が東京市杉並区阿佐谷5の66の斎藤潔、発行所が東京市四谷区伝馬町1の33の本田清一方の基督教詩歌社、発売所も東京市豊島区西巢鴨3の703

¹⁸⁾ 同書著者による「小序」には「一粒社主横井憲太郎」への謝辞がある。

の長崎書店となった。店主を長崎次郎がつとめる同社は、このおよそ半年ののち、小川正子の『小島の春』（1938年11月）を売りだす。基督教詩歌社の同人数は40となった。

第4巻第6号11月号第20号（1939年11月10日）は、45名の同人によってつくられた。そのうち、渥美芳直、竹林誠一郎、長谷部俊一郎の3名が「編輯同人」にわけられている。編輯兼発行人は、ふたたび長谷部となる。この同人名簿に、藤本秋風の名がない。

第5巻第4号7月号（1940年7月25日）は、同人42名、そのうち編輯同人は前号におなじ。

第5巻第5号9月号（1940年9月25日）の同人数は前号とおなじ。これ以降は終刊号まで同人数に変化はない。奥付から長崎書店の名が消える。定価が25銭に。

第5巻第6号12月号（1940年12月10日）に穂波の寄稿がある。表題は「ひとことの祈り」。

第6巻第1号2月号（1941年2月5日）には、前号に掲載された穂波の詩への評がある。

「ひとことの祈り」長田穂波氏 今迄にない誠実を覚える詩である。散文的な表現ではあるが、それが苦にならぬ程、心の動きとしてはづみ方があつて、長田穂波氏らしいといへる

と、ひさしぶりの穂波の寄稿を得て、その表現に穂波らしさがみつけれられている。

第6巻第3号7月号（1941年7月16日）の奥付には、「配給元」として日本出版配給株式会社の名がくわわる。同号の本田清一による「詩評 読後随想」は、おそらく第6巻第2号に掲載された作品への評だろう。穂波は「のどか」と題された作品を寄せたようだ。

病苦と闘ふ生活の断片の中にも、かゝるのどかさがあることを忝けなく思ふ。病人にとつて最も幸福な時は自分が病人であることを忘れてしまふ時である。

第6巻第2号はいまのところその所在がわからないため、この詩がなにをどのようにならしたかは知りえない。穂波はそこで、病人であることを忘れた、あるいは、忘れたい、または、忘れられない、とうたったのだろうか。

第6巻第4号9月号（1941年9月18日）の読後評欄の総評はきびしい。

全体をとほして、もつともつとお互ひ勉強せねばならぬ事を教へられる。同人達はもつと他の詩誌も読むべきである。私は「日本詩壇」の同人であるが、彼らの努力は大したものである。無理に神や信仰を持つてくる様な宗教的感傷主義の詩を何時迄作らねばならぬか。世紀の転換期らしい宗教詩が欲しい。

との強い要望である。

第6巻第5号12月号(1941年12月1日)では、内田正規が発行する逐次刊行物『清流』の紹介がある(白石濤村「『清流』を見る」)。「基督教文学雑誌として、内容が聖書的であり、しかも詩的なうるほひを十分もつてゐることが嬉しい」と讃えられたうえで、「神を中心とする信仰の世界が、人の情感を主とする文学の視野に於て^{〔マ〕}始何に歪まれずに正しく開花結実するか、之は等しく基督教文学雑誌の負へる至難な点であると私は信ずる」との課題も示されている。

『清流』には、しばしば穂波も寄稿していた¹⁹⁾。その第2号に「長田穂波氏の梅雨の晴間といふ詩がある」というが、同号はいまのところみつからない。

第7巻第1号2月号(1942年2月1日)に掲載された穂波の詩は、「勝利の年玉」という。

表紙に「終刊号」と印字された第7巻第2号5月号(1942年5月30日)をもって、『基督教詩歌』の発行が終る。「謹告」の見出しがついた文章は、「今回止むなき事情により「新興基督教」誌と合同の上、発展的解消を^{〔マ〕}逐ぐることになりましたので、誌友諸氏の誌代残額は全部返金」することを伝えた。渥美芳直の「編輯後記」は、「此の詩歌誌に関係した凡ての人々が、更に一層の祝福を得て神の栄光を顕はし、皇国の文化に寄与する所あらしめ給はんことを祈ります」と結ばれた。

ここに穂波は、「献祖国同胞へ」と題した詩を寄せた。執筆の日付は、1942年3月5日。

穂波はもう1つ、『基督教詩歌』の終刊を同人たちが惜しむ「思ひ出の記」と題された欄

19) 『清流』はいまのところ国立療養所大島青松園のキリスト教霊交会図書室にしかないとおもう。同誌に掲載された穂波の作品については、阿部安成「死んだ穂波の横顔にー長田穂波探索」(滋賀大学経済学部Working Paper Series No.130、2010年4月)、同「長田穂波の聖ー消えゆくものども」(同前No.131、2010年5月)を参照。

に、「更に太平洋へ」という一文を寄せている。これも1942年3月5日付である。

④ 1936年から1942年にかけて、詩歌をつくるとはどういうことだったのだろうか。もとよりその全体を論じることはできないので、それを『基督教詩歌』に即して考えてみよう。

『基督教詩歌』は、創刊1周年を経て第2巻第4号を「一週年記念七月号」として編んだ(1937年7月3日)。長谷部生による同号の「編輯後記」は、「今後の編輯や方針についても編輯同人間にも、いろいろ計画があるが、一つは明年新年号をして、名実共に基督教年刊詩歌随筆集として、基督教文学の最高の収穫たる歴史づけをしたいと苦心してゐる」と進行中の企画を明らかにした。続号でもその方針と意気込みはかわっていない(「次号新年号は発表したやうに基督教文学の最高水準を記念編輯し「特輯号」としたい。そのために、今から準備をしてゐる」長谷部生「編輯後記」第2巻第6号第9輯、1937年11月3日)。けして大規模な同人組織による大運動とはいえない活動ではあったが、少数による小規模な編集と出版であっても、そこには、「基督教文学の最高」を体現しそれを提示しようとする情念が漲っていた。

だが、この企図は実現しなかった。その理由を長谷部は、「詞華集としての^(マ)万善の計画もあつたが、経費等の点も考慮に入つてこの程度のもので出来た」との忸怩たるようすを述べていた(長谷部生「編輯後記」第3巻第1号第10輯、1938年1月1日)。とはいへさきにふれたとおり、表紙に「現代自選詞華集」の文字を明示したところにあらわれているとおり、「まだまだ精進の余地はあるが、これがわが国宗教文学の水準ですといつて示すものが出来た」との自負も表明されていた。すでにみたとおり、紹介、宣伝、寄贈などをつうじた関連誌が複数あるところで、『基督教詩歌』という媒体には、あるいは長谷部俊一郎という編集者には、キリスト教=詩歌=文学という連環における牽引車であるとの自覚があり、それを活力とした運動で詩人や歌人たちを引っばってゆこうとしたのだった。「本年度に於て基督教詩歌の法灯(?)を最も活々と継いたのは本誌であらう」(斎藤潔「一九三七年・基督教詩歌界の回顧」)との自任もみせている。そうであるから、同人相互の厳しい

批評もまた当然なのだった。

『基督教詩歌』誌上では、「我等の間に新時代に応じて革新してゆかうといふ熱意が足りぬやうに看取され残念である」との悔恨が述べられるときもある（「折にふれて」3(1)、1938年1月）。そこでは、「最も時代を敏感にうけるもの」としての「詩人」と、「予言者的な使命」を担う「信仰生活」と、「決して概念であつてはならぬ、身をもつて感じたありのままのすがたをいきいきと歌はるべきである」との流儀とが結びついた理念に照らして、自分たちの現状が省みられている。「信仰も時代を離れては血の通はぬ像に等しい」、「我等の詩歌は時代をくゞつてその中に動いてゐる基督教の精神を含むものでありたい」といった時代性の獲得は、「抽象された観念」を排除して「絶えず検討して現状打破を企ててゆ」こうとする方針として提示されるのである。

こうした時局に鋭敏であろうとする姿勢は、『基督教詩歌』誌上に「祖国」を呼び込むようになる。三浦清一の「私は強く祖国を感じずる」と題された詩が、1941年7月発行の6(3)に掲載される。三浦は、「祖国の象徴」である「阿蘇の山々」に「つよく祖国を感じずる」気分をうたっている。「太陽はまだ昇らない」と閉じられたこの詩は、陽がのぼる夜明けを望んでいるのだろう。「世紀の転換期らしい宗教詩が欲しい」と誌上で望まれるとき（6(4)、1941年9月）、そこにもとめられた詩が捧げられる転換とは、戦争となる。同号に長谷部が寄せた「我等祖国を感じずる」という題の詩は、「国土わが秋津島根をまもりつゞけ」とうたい始まり、「八紘を一字とする理想をたもち」、「東亜のかゞやきに身をもつてあたらんとする」、「祖国の自覚に生きんとする」気概を響かせていた。「国民が愛国の至情にもえ立つ時、我らの陣営から本当に高い祖国愛と信仰の渾然一体となりたる歌が生れねばならぬ」というのである（竹林生「編輯後記」6(5)、1941年12月）。この6(5)発行から1週間後に開戦となる。

長谷部は開戦後最初の号に寄稿した詩を、「昭和十六年十二月八日」と題した（7(1)、1942年2月）。

ハワイを襲つた空軍の果敢な攻撃のニュースに／わたしは世界が動くのを感じた
おどろくべき速さで／祖国を中核とした新秩序が敷かれつゝある

東亜の黎明期が／現実この歴史の上にはあらはれつゝある

同号にはまた、基督教詩歌社編集部の名で「我等の新しき団結の提唱」という記事も書かれた。1941年12月8日を「一紀元として世界は一大転換期にはいつた」と現状をとらえ、その意義を「歴史上の曾てなき偉大な東亜の新秩序を建設すべき黎明をつげる日である」とみせる。同号に寄せられた作品の「気魄」を「アジア十億の民族の解放の運命を決せんとする〔中略〕建設期の先駆的役割をもつて神における新しい道義とその実現」と確認したうえで、「こゝに我等同人は一致団結して聖なる愛国運動を興し、祖国にその重責を果すべき三十万の教徒の声として新たなる文学を創作するため結束すべきことを提唱した」のだった。「実に我等にとって感激の年でなければならぬ」との決意である。

終刊号となった次号（7(2)、1942年5月）には、穂波も「献祖国同胞へ」と題した詩を寄せたのはすでにみたとおりである。『靈交』紙上でも、「大東亜」や「祖国」の語を掲げた穂波だから、「八紘為宇とは／聖書の示す大真理」とうたう彼は異様ではない。

いくにんもの同人が「思ひ出」を記すなかで、長谷部は「わが児のやうに愛育して来た『基督教詩歌』の「消長の跡を一つ一つ思ふてみた」。そこから終刊への経緯をみておこう。だんだんと用紙が「払底」し、「売上げ」も悪化し、同人たちも「多忙」となり、第5巻以降は「現状維持」がやっとなり、「内部としてみても、結成は出来たが、更にもっと深い基督教文学の核心を衝いて、祖国へ貢献しなければならぬ時代的切迫感が第六巻の殊に後半期頃より」感じ始めたという。そして、「わたし共の覚悟を一新させた」きっかけが、1941年12月8日の「大東亜戦争」となった。季刊とするか合同かの選択となったとき、「日本基督教団出版局よりの雑誌統合の内意があつて」、これに応ずることとした。だが、「教界雑誌の完全合同にはその機到らず、実際、合同の賛成を示したものは、「社会的基督教」誌、「福音」誌、「新興基督教」誌、「基督教詩歌」誌の四雑誌に過ぎず、この四誌合同による教団の機関紙とするには、日本基督教団総務部ではこの不賛成で、この出版局案の採択とはならなかつた」との顛末が示された。そこで、「四誌の合同によつて、新時代に応じようとすることに決し、「新興基督教」誌への合流」となったのだった。いま大島の靈交会教会堂図書室には、この4誌は1部すら残っていない。

『基督教詩歌』は、キリスト教の精神を自己の根元にすえた日本人による、リアリズムや写実性を理念とする文学を発信した逐次刊行物だった。そこに鋭敏な時代感覚を組み入れようとする絶えざる自覚が、1940年代の時局にするどく向きあったとき、

大いなる日は来りけり一億のみ民のはえをいざ讃へなむ〔関根文之助「大東亜建設戦」。

以下同〕

まつろはぬものをことむけやはすてふみいくさ進むいよよ進めり

しらす国全うせむとみいくさの高き理想に副はむわれらは

南方楽土打ち建てむものひとり我が日本を措きて他にはあらず〔吉村武「大東亜戦争」。

以下同〕

皇国の栄ゆる世に逢ひ半世の我が生命捧ぐべき事業を思ふ

と、終刊号にて、一億の民の一体感、それと連動する服従しないものたちを平定する使命とその進展、そのための手段としての聖戦、それを行使しうるものとしての「我が日本」、そこに生きる「我」、が文学によって、文学としてあらわされたのだった。

⑤ そうした『基督教詩歌』に、同人穂波はなにを記したのだろうか。本文はうしろに掲げるとして、同誌に掲載された穂波の全作品をあげておこう。

「告白」1(3)、1936年11月10日

* 「除夜の鐘」(「瞑想」「暁望」) 2(1)、1937年1月1日

「靈交」2(2)、1937年3月17日

* 「わが身を語る」2(3)、1937年5月10日

* 「朝に勇み夕に憩ふ」2(4)、1937年7月3日

* 「聖婚歌」2(5)、1937年9月7日

「希望は確し」2(6)、1937年11月3日

「元日の訪問者」3(1)、1938年1月1日

「うたふ妹」「丘に立ちて」3(5)、1938年5月25日

* 「ひとことの祈り」5(6)、1940年12月10日

「勝利の年玉」7(1)、1942 年 2 月 1 日

「献祖国同胞へ」7(2)、1942 年 5 月 30 日

「更に太平洋へ」同前

「更に太平洋へ」はスタイルは詩だが、散文の欄に掲載されている。それ以外はすべて詩の欄となる。現存する号に批評が掲載された稿には、題のまえにアスタリスクをつけた。

すでにみたとおり、穂波の作品にはおおむね好評が寄せられているといつてよいなかで、「聖婚歌」と対象作品不明とについては、そこに、ある欠落や古さが指摘される厳しい評となっている。ただし、よいといいうる評における、「作者独自の体験より湧き出でし力強さ」、「うるほひがあり力強い美しさ」、「深淵を視く蒼涼さ」、「初期のものは少くとも情熱が文字を越えて感じられた」、「心の動きとしてのほづみ方があつて、長田穂波氏らしい」との言について、わたしはその適否を論じることができない。「穂波氏らしい」といいうるほどに情報をあつめていないともいえるし、はなから批評のスタイルがちがうからともいえる。せいぜい、「誠実」「熱烈」「柔かい情熱の気が漲つてゐる」といった評言に賛成するくらいである。同人誌上での同人による批評とはべつに、こうした「文学」作品をどのように読めばよいのか。わたしはそれを模索しているところだ。

詩「告白」において、「レプラ」と明示した穂波は（もともと自分がそうだとはっていないが）、自己を、自己の信仰を、あるいは自己が生きる療養所をうたっている。つまり、「わが身を語る」穂波が『基督教詩歌』誌上にいるのだ。そうしたなかで、「聖婚歌」がなぜいくつもの不備を指摘されなくてはならなかったのか、わたしにはそれがよくわからない。『基督教詩歌』誌上の穂波の作品を一覧すれば、そうした不備よりももっと明瞭に 1 つの転換に気づくはずである。それは、1941 年 12 月 8 日を境として、「わが身を語る」のではなく、「一つの祈り」（「勝利の年玉」）をおこない、かつ、「祖国日本の立場」と「福音の大切な真理」とを「自覚」する「我ら」（献祖国同胞）が、「更に太平洋へ」と乗り出してゆく勢いを得ているとの一体感と使命感と昂揚感とを述べるようになったことである。

いま明確に、ていねいに論述をする用意はないが、おそらく、『基督教詩歌』誌上の穂波

の姿勢は、祖国愛を呼号する、大島での『藻汐草』『靈交』『青松』誌上での筆勢と連動しているだろう²⁰⁾。1940年代の刊行物として、『基督教詩歌』はとくにかわった主張をしている逐次刊行物ではないし、1940年代の穂波にとって、同誌上での文学がほかのメディアでの議論と異なっていたわけでもない。ただし、穂波が『基督教詩歌』誌上に記した前述の「我ら」がどういった範囲の人びとを指すのかは、もっとていねいな考察を必要とするだろう。だが、わたしにはいま、療養所外の「祖国同胞」たち1億の民と重なるようにしている「我」の自覚であるとみえる。もとより穂波は、自分を出征しうるものとみていたわけではない。1944年以降、療養所では一斉に刊行物を休刊して、「自発的な沈黙を選び取らされた」²¹⁾なかで、もしかしたら唯一の例外として手書きてづくりの『青松』を回覧しつづけた青松園では、〈埒外の同胞〉として祖国への愛をうったえ、かつその修正を展望しつつ頓挫した軌跡があり、そこにいたる昂揚の一場として、穂波のいる『基督教詩歌』誌上を読むことができるようにおもう。

20) ひとまず、阿部安成「癩と時局と書きものをー香川県大島の療養所の1940年代を軸とする」(黒川みどり編『近代日本の「他者」に向き合う』解放出版社、2010年)。

21) 荒井裕樹「隔離のなかの〈大東亜〉ーハンセン病患者の戦争詩」(『東京大学国文学論集』2、2007年5月)。

『きりすと教詩歌』第1巻第3号、1936年11月10日

告白

長田穂波

たゞ一本の十字架を
信じ仰ぎて呼吸するもの
それが私の生命である

余りに貧しい姿よと
仰せらるゝか……………？
さあれ現世は夢のまた夢！

レプラの眼には赤裸々に
何が真か、何が嘘か
まざまざ映る裏と表てよ

神の子の血の潔めより
新たに受くる其儘が
そこに私の生活がある！

昭和十一年九月十五日

『きりすと教詩歌』第2巻第1号、1937年1月1日

除夜の鐘

長田穂波

瞑想

あな^{おそ}怖ろしき哉サタンの^{おな}謀略
愚かにも弱きこの身は

幾度か倒れつ起ちつ

醜き限りの恥を晒ししか

ゆくこの年の悔や深し。

みめぐみなくば みたすけなくば

主の十字架の贖ひなくば

とくの昔にほろびしものを

いまかくてある生命の悦び

斯も尊き父愛の体験……………。

オー過ぎゆくか永久にとはに

思い出おほき この年こよひ

罪のかずかず頭を負ひて

彼のアザエルの羊のごとくに

いざ汝を送らむ除夜の鐘つき！

暁望

年あらたまれる空の大地に

神に勇める心霊は躍るよ

丘の上なる祈り家に走りて

歌うたひつゝ希望にひゞけよと

握りしめたり 鐘のいきづな。

神には栄光 いや高くあれ

地には平和 人には喜び

眠れる霊よ新年さめて

とほ
永久の生命を受けよと撞けば
音波は強くも ふるひひろごる。

オーわが神よ われらの^{ちち}天父よ
石の如きをアブラハムの裔となし
釧を折りて……世界を潔め
^{みたま}聖霊の能力で導き治めてよ
力の限り祈りを込めて除夜の鐘つく！

『きりすと教詩歌』第2巻第2号、1937年3月17日

霊交

長田穂波

醜い形の花ながら
潔い香りに咲いてゐる
御空仰いで咲いてゐる

彼の花の上に純白の
一羽の鳩が舞ふてゐる
昇りくんだりつ舞ふてゐる

明け行く朝の渚辺に
暮れ行く丘の家むらに
夢路へつゞく星空に

主の十字架の立つところ
祈りの霊の住むところ

よきをとずれ^き
福音^きを読むところ

神の永生^{いのち}の苗代に
いつも香りを立ててゐる
いつも静かに舞ふてゐる

『きりすと教詩歌』第2巻第3号、1937年5月10日

わが身を語る

長田穂波

私の生存！
さあ……何と言はふ？
確に不幸である
が……………が……
確に幸福でもある

寒月の下にゆれ動く
くぬぎ林のやうな
余りにも淋しいものが
ヒシヒシと骨髓に
しみ徹るのを覚ゆる

だが、枯葉の落ち積り
腐朽した底土より
若々しき生命の芽が
昇天の勢を示し
時の来るを待ちわぶる……

これだ……確に……！

社会のドン底に

埋もれ尽したもの

生る屍

光りなき暗の淵に座せども

久遠の春を抱きしめて

静かに微笑みつゝ

『来るべき太陽』

永生の愛を仰ぎ

その温味を詩ふてゐる

淋しい姿の

幸福の所有者

冬枯の下に

春の花をもつてゐる

これである……私の生活は！

『きりすと教詩歌』第2巻第4号、1937年7月3日

朝に勇み夕に憩ふ

長田穂波

生命の盃を捧げつゝ

暁の天使は

金色の冠の輝きに

雲を染め、海に映えつ

もの皆「醒めて受けよ」と
勢ひよく、昇る昇る人の世の空
日々新しき光明のおとずれを！

あかね色なす
聖きもすそを引き
夕澄める大空を静かにも
「安息と約束」の、ふれ示すは
天津み使の、うたごゑなる
鳥はねぐらにて草は葉を合せて
みまもりの肌に、祈りつゝ憩ひに入る！

この朝の生命を
この夕の安息を
誰が……何が、死の予兆となせし
張れよ、わが魂、神への翼を
伸びよ日と日に……夕べとへば
明日を聖約されし安息に入れよ
エホバと偕にある者は幸福なり！

『きりすと教詩歌』第2巻第5号、1937年9月7日

聖婚歌

長田穂波

燃焼し尽さずば止まじと
熱情の血のたぎりに
飛び込みきまして

火の如き口吻しきりなり。

何ものも開き得ざりし

頑心の蕾も恥らひつ綻び

聖懐深くふるえつゝ

愛の歡喜にほゝえむなり。

君は太陽のごと輝き

我は花片のごと香る

噫、聖なる哉うるはしき哉

聖婚の歌は高鳴る……………！

『きりすと教詩歌』第2巻第6号第9輯、1937年11月3日

希望は確し

長田穂波

瑞雲輝く我が大空！

雲かれをうけ

彼れ雲に乗りて

来まさむ……………遠からじ

その日、その時

万物またく

あらたまりて

よる、二度きたるなし

新天……………新地

愛花咲きそろひ

陽の薫り永久なり

瑞雲輝く我が大空！

『基督教詩歌』第3巻第1号第10輯、1938年1月1日

元日の訪問者

長田穂波

さうですか？人生を深刻に考えると淋しくなる、寂寥な自分を洞空な闇の中に発見する、それで酒の中に逃避なさるんですね。それをお姉さまは、理解なくて、いまにも刑務所へでも行かねばならぬ人間のやうに、ガミガミ言ひなさる、そこで喧嘩が絶えない……
……！

×

ですが、酒や女はお止めなさい……………あんなものを用ひる事は無駄でせう……………
貴方の淋しい自分を充たすものは物質でないでせう！

「愛」でなくてはね、大きな深い！

貴方は決して弱い人でない……………然し、歩み方がマルゲ反対ですね、お気の毒ですが滅亡しますよ……………このまゝでは確に！

×

冷たい石炭も燃やすと、ドエライ発熱するものです……………燃えなくては人生も冷たく暗いものですよ。「火は愛にあり」ですよ！

何にツ、愛して呉れぬツ……………馬鹿ツ、我利我利亡者めツ、愛は愛して燃ゆるのだ！

伶俐ぶらずと、この姉さま一人でも本当に愛して見ろ、それさえ実行せず、何が人生だ、何が寂寥だ、聞いて呆れるね……………。

×

はははははは、元日から癩者に叱られたと思ひなさらぬやうに、貴方の淋しい生命が貴方を叱つて居るのですよ。

泣いて居られますね？悪かつたと気附れた、ソレは結構……………姉が泣いて叱る心が今理解できたと、愛の焰が泣いて叱る……………。

×

お姉さん……………貴女も不可ませんよ！

この立派な弟さんを、何故に駄目になさるツ……………それは違ふと……………ちがうものか……………不良と名打つて私の処に連れて来たのは誰です？意見してやつて呉れと言つたのは……………。

真に弟を愛するならば、マサカの時家は家の誇りも名の誉れも棄て、共に刑務所の月を仰ぐ決心に成りなさらぬ！

おふたり共……………十字架の無い愛は、駄目ですよ！

×

お祈りしてゐますよ……………。キツト改めてやります！ さやうならさやうなら

(終)

『基督教詩歌』第3巻第5号5月号、1938年5月25日

うたふ妹

長田穂波

黄昏るゝ窓へ

花の散る庭に向ひて

たゞ独り妹はうたへる

人の世の悲しさ

過ぎ行く春よ

われも行かまほし

永久の春

輝ける生命のくに
約束の……約束の
君が聖国へ
繰り返し、くりかえし
花散る窓へ唯ひとり
夕やみの中に妹はうたへる。

丘に立ちて
ゆく雲に
こととひしかど
いらへなく
遙かゆくてに
山ひとつあり……。

呼びかけて
こととひしかど
いらへなく
山たつ下に
海あかり見ゆ……。

『基督教詩歌』第5巻第6号12月号、1940年12月10日

ひとことの祈り

長田穂波

俺はな……
朝パツチリ目を開くと
『父なる神さま！』と呼び

夜は寝床に伸びてから

『お父さん有難ふ！』と呼ぶ

たゞ一言の祈りだが

これで大安心であるよ 毎日が！

それはね……

人の世の生活のことだ

何時、どんな事件が湧き上るか

それは計られませんよ

だが地軸が砕けやうとも

大空が巻き去られやうとも

決して心配はないんだよ……

父なる神はね！

貧乏この上なしの俺を

無力この上なしの俺を

十分に充して、大丈夫にも

やる事に導いて下さるのだよ

だから何事にも平気で

ぶつつかつて行けるんだ……

一言の祈り……

『父なる神さま！』

この一言だが千万無量の思ひだ

もしこの祈を切断したとしてみる

俺の『神の子』である

確信す生命の血がトクトクと

ことごとく流れ出てしまふであらふ！ (以上)

『基督教詩歌』第7巻第1号2月号、1942年2月1日

勝利の年玉

長田穂波

＝ 新年お芽出度ふ ＝

ことほぎ交す間にも

何処ともなく烈しい激しい

爆音と ときの声とが

心臓の底にひびきてくる！

何の家にも誰の瞳にも

笑ひの波のうゑを淡い煙と

張詰た心の火が燃え流れて

皆同じ一つ祈りが

音もなく立ち昇つてゐる……

細き聖言を伝へ静かに！

＝ 御父よ！ ＝ 仰ぎあぐる

この祝福を配ることは

何程、諸氏に喜ばれて勝利の

明るい春の輝きを起す事か……

『基督教詩歌』第7巻第2号5月号終刊号、1942年5月30日

献祖国同胞へ

長田穂波

踏まれても
凍てついても
草芽は萌えあがつて来た
こいつキリストの
救ひの血汐のやうだぞ！
叩かれても
迫害せられても
止むを得ず生活の実際に
現れて来る義と愛
信者とは永遠に生るものだ！
八紘為宇とは
聖書の示す大真理
これは相互に犠牲を負合ふ
実行によりて
現れて来る＝神の国＝だ！
路傍に萌える草芽
生活となる救ひ
犠牲で生れる平和
噫、静かに強い
復活永遠の神の真理である！
我らは自覚する
いま祖国日本の立場を
そして福音の大切なる真理を……。

(マコ) (咽和十七、三、五)

更に太平洋へ

長田穂波

生れるべくして生れた「詩歌誌」が、誕生から今号迄に何を為したか、それは観方にもよるが＝神の栄光を仰ぐ＝祈りの他ではなかつた……。

人間の為す処、そこには最初の目的よりそれ易いものである。神の栄光より自己の満足に傾いて行くものだ＝つまらぬ享樂に＝恐るべし……。

もの事の経営には、立派な理想も崩れ易いものだ。それは成功しても。まして不成功の場合は尚更である＝経済に捕はれる＝こゝにある……。

多勢の力を依存する事業、特に文芸作品如きは、名ばかり出して捨て置く者があつて書く人は同じ少数の顔ぶれになる。これが面白くない……。

編輯をする事は、作者より感謝されてよい立場である。然るに＝どうぞどうぞ＝と反対に平身底頭せねばならぬ。そして不平を言はれる……。

大家が書いて呉ないから、小家でも＝でも作家＝を刈立てる。我等小家はつらい、ついに大家同人の作品に何時お目にかゝれるか淋しい哉……。

幸ひ「詩歌誌」は比較的に好成績に来られた。頭初の目的を果しつゝ伸びて来た、感謝いたします。更に止揚されて大洋に合流せらるゝのだ……。

キリスト教文芸が真実力を發揮するのは是からだ。今後は名家大家が乗出すであらふが小家も無名も活躍して欲しい。殊に詩歌同人の勇健を祈る……。

昭和一七、三、五